

何故？・・・邪馬台国の所在地をめぐって、どうして 絞り込めないのか？

要 旨

諸子百家・・・各地乱立・・・しかし絞り込めないのは、基本的には九州説だけといえる。九州説以外は異論もあるが、概ね、大和説であり、さらにピンポイントで纏向遺跡にて一致している。また、最近の考古学者の間では、その大半の人が邪馬台国の女王が住む都は纏向遺跡を支持しているという。

それに比較して、九州説を唱える方々は、その邪馬台国の所在地が、ほぼ北部九州、筑後川流域、または九州全土に広がっている。そこでは、その所在地を絞り込むために、多彩で色々なアイデアが盛り込まれて読んでいても実に楽しい、色々な資料を研究して、推理するという倭国古代史の歴史ロマンがある。

おそらく邪馬台国の九州説を唱える書籍類は大和説より、売れ行きも良いようである。その書籍類に自分の唱える九州説のエリアになぞらえて、思考し、組み立てて、魏志倭人伝を読み込んで、まさに古代倭国の邪馬台国をあった、とされる地域を推理することは実に楽しいものである。

しかし、九州説を唱える方々が100人いたら、その大半の方々が当時の倭国に何か所に存在していたはずの、邪馬台国があったとされる場所には、たどり着かないという、現実がある。

これらの説では、九州全体？（特に北部九州）のどこへでも、邪馬台国の比定地は、どこへでも合理的？に持っていけるという便利（出発起点を朝鮮半島や大陸にする？）な独自の推論もある。

その点、大和説は異論も少々あるが、概ね大和の纏向遺跡で一致している。しかし、大和説の書籍類は、実をいうと、あまり面白くない。そこには古代倭国の歴史ロマン（推理する楽しさ）が少ない？と思われる。おそらく書籍類の売行きも少ないようである。

結 論

- ① 帯方郡から女王国までの一万二千里という記載がある。ここで短里説？なるものがある。1里が約70～100m？で、周髀算経で証明された？と言うが、これは九州説を唱える方々でも微妙に違うようであり、中国では、その単位（数値）は過去にも、全く使用されておらず、現今の日本の九州説の方々だけの説？である。
- ② 南水行（20+10）日、あるいは陸行で行くと1ヶ月という記載が短里説？なるものと、著しく食い違っており、上記の日数で、当時漢帝国や魏国で使われていた1里が（約420m）であると、九州島を超えてしまうのです。

上記の二点が邪馬台国の九州説が絞り込めない最大の矛盾と言えるのです。

何故？・・・邪馬台国の所在地をめぐって百科繚乱しているのか、どうして絞り込めないのか？

諸子百家・・・各地乱立・・・しかし絞り込めないのは基本的には九州説だけといえる。九州説以外は異論もあるが、概ね、大和説であり、さらにピンポイントで纏向遺跡にて一致している。

また、最近の考古学者の間では、その大半の人が邪馬台国の女王が住む都は纏向遺跡を支持しているという。

それに比較して、九州説を唱える方々は、その邪馬台国の所在地が、ほぼ北部九州、筑後川流域、または九州全土に広がっている。何故、そうなるのか？「魏志東夷伝倭人の条」（以下、魏志倭人伝という）には当時の倭国のことを2,000字余りで詳しく紹介されており、当時の倭国の歴史的資料として、第一級の資料といえる。その記載内容の中で邪馬台国の所在地を示した個所が何点かあり、その解釈の方法が分かれており、その文面は良く言えば難解、悪く言えば、あいまい、不明瞭、不正確、ともいえる。

また、その主語が省略されており、この種の本の解説などを、かなりの数になるが、まさに諸子百家、百花繚乱、まとまらないようで、特に九州説を主張する本が多いようだ。

それぞれの解釈の方法を綿密に解き明かし、詳しく解説がなされている。中には少々綿密過ぎて、より難解なものとなり、迷路に入っている、きらいもある。

それらの本の中には、自説に都合の悪い個所はほとんど無視しているか、または、単なる間違いとしている本も数多くある。

魏志倭人伝の記載には、邪馬台国までの距離、方位には大きな矛盾がある。

- ① 帯方郡から女王国まで一万二千里、つまり、残りのキロ数を数えると伊都国～邪馬台国まで距離は1,500里となる。
- ② 不弥国から南水行(20+10)日、あるいは陸行1ヶ月という距離。また、伊都国から起点をかえて、それぞれ、南水行20日で投馬国、南水行10日あるいは陸行1ヶ月で邪馬台国に到着するという放射式と言われている解釈もある。
- ③ 倭人の住居地を「その道理を計るに当に会稽・東冶(福建省付近か?)の東にある」とある。
- ④ 女王国に東、海を渡ること千余里にして、複、国あり、皆倭種なり、・・・さらにその後続く侏儒の国は女王国を去ること四千里、裸国、黒齒国?・・・周旋五千余里なりという。

上記の①と②③との記述では、明らかに喰い違い、大きな矛盾となっている。どちらかが、誤りであると思う。また④についても、海を渡ること千里とは、九州説を支持する方々によると、四国のこと?らしいが、本当にそうだろうか、より近い、目の前にある大きな本州の山口県辺りのことは、まったく触れられていないのに、なぜか、四国地方に記述がなされている?その他の記載事項もやはり、実際の日本列島の姿・形とは異なっているようである。

帯方郡から女王国まで一万二千里と記載されており、すでに伊都国まで一万五百里なので12,000里-10,500里=1,500里となり、伊都国～邪馬台国までの残りの距離は1,500里となる。

ここで1,500里というのはkmにするとどれくらいの距離なのか?

これは、当時の魏の一里は何mか、魏の洛陽から帯方郡までは五千里だという。とすると朝鮮半島の七千里というのは、実際より、南に、大きく伸びていると勘違いされているようだ。

当時の魏の一里は何mか?一里は435mぐらいで、歴代の秦帝国、漢帝国、魏国などで定められており、特に秦帝国では、異なる数値を用いると、厳しく罰せられたようであり、

当時の魏国の知識人たちが、大陸（魏国と遼東半島周辺）では一里＝435 mである通常の距離で表して、遠方である朝鮮半島や倭国には、地元（中国内）では、一度も使用されていない短里説？を用いた？などとは、当時の魏国の皇帝に仕える高級官僚（学者）である知識人が編纂した、魏志倭人伝という皇帝に献上する正史書である、

後世に残す東アジアの地理（歴史）書としても、考えられないのである。当時の知識人たちは朝鮮半島や倭国は、単純に、南方に長く伸びていると勘違いしていたのだろう、と考えるが自然である。

その後の中国では、九州説の方々が唱える短里説？（一里は 70 ～ 100m ぐらい？）というものは、一度たりとも、使用されたことが無いようです。

要するに、先ほども触れたが、この短里説？というのは当時、絶対になかったメルカトル図に合わせて推定された、数値であり、邪馬台国の所在地が九州島内であると信望されている、現今の日本の九州説を信望している方々だけの独自の短里説？と言える。

このように当時、絶対に存在しなかった、現今の正確なメルカトル図法で表された、邪馬台国への行程や方向（当時、魏国の使者が正確な測量というのは海上でもあり、不可能であり、渡海は全て、千余里という記載は目測だろう）の計量を合わせる事が、多少の参考（特に朝鮮半島南端から奴国までの方向性）にはなるが、それに束縛？されるのは、いかにナンセンス（無意味）な論理である。

そこに、こだわる必要はないようにと思う。何故ならば、論理の前提（二点の資料）が最初から噛み合わないのである。九州説と大和説も噛み合わないようだが。

つまり、当時の古代人（中国人・倭国人）の精神世界（東アジア周辺の地理感）を考慮するには、現代人の東アジアの正確なメルカトル図を思い浮かべることが、この邪馬台国の所在地を絞り込むのに、**大きな弊害**、になっていると思う。

当時の古代人（中国人・倭国人）の東アジア全体の地理感覚では邪馬台国の所在地が、現代人が考えるような沖縄列島、台湾、フィリピン、赤道などに近くなる？海に水没する？などと、考える中国の知識人は絶対に、皆無だったはずである。

九州説を支持している方々の短里説？（一里は 70 ～ 100m ぐらい？）なるものは、色々な思考方法があるが、現代の九州説を支持している方々が、当時、絶対になかったメルカトル図法による地図をみて、魏志倭人伝の行程に記載されている、大陸から遼東半島、朝鮮半島の南、対馬、壱岐、末路国まで距離がすべて、千里？と記載位されているので、押し測って、推測して出てきたものだろう。

ところで、このメルカトル図による地図の真下は、地球儀による真南に示すが、地球は太陽の周りを23.7度程度、傾いて公転しているので、当時の漢帝国や魏国では、昼間は、太陽方位が真上（正中）に来た時が真南とされているだろうから、一般的によく目にする、メルカトル図は、右下に23.7度程度、下げたのがよい。これで、魏志倭人伝の微妙に南南東に方位がずれているのが理解できると思う。

ちなみに、大陸から見た、日本列島のある程度の正確な位置関係が理解されるのは、おそらく、江戸時代後期の幕末あたりに欧米各国による、東アジアへの植民地政策が盛んに行われたころになるようで、それまでは、欧米各国はもちろん、中国大陸から見た、日本列島の姿方・形は、大きくかけ離れているようであり、16世紀のマルコポーロに紹介された東方見聞録による、**黄金の国ジパング**、でも、そこに表された日本列島の姿とは、特に大きくかけ離れていである。

このことは、日本人から見た北海道の地図（位置や形状）も幕末ころに間宮林蔵による蝦夷地探検が行われて、やっと伊能忠敬の弟子らによって、正確な姿・形が表された、つい最近（140年前頃）のことである。

日本列島のなかの狭い範囲でも、北海道の地理（位置や形状）が不明だったのであるから、ましてや、中国大陸から見た、遠方の異国である朝鮮半島や日本列島の正確な姿・形は全く、未知の世界だったのあろう。

結 論 と し て

中国大陸では、一度も使用されていない短里説？なるものを疑い、我々、現代人なら必ず頭に浮かぶ、東アジア周辺の地図（メルカトル図＝当時は絶対に存在しなかったもの）を思い浮かべないことが、当時の中国大陸の古代人の精神世界（地理感覚）に近づけることになるのである。

当時（後漢帝国・魏国）の中国大陸の知識人たちは、東アジア（朝鮮半島・倭国など）の地理感覚というのは、現在人なら、だれでも知っている正確な地理感とは、かけ離れており、特に倭国は、南に大きく伸びているものと魏志倭人伝の記載からすると、勘違いしているように思われる。

上記のことは7世紀前半に、当時の「隋書」倭国伝、魏志倭人伝の邪馬台国とは邪馬堆のことで南水行を東水行である旨に訂正されている。このことは大変重要なことである。

今日、日本では邪馬台国の所在地については、その、「決めて」は無いとされているが、この訂正こそが、邪馬台国は大和国にあったというである。これ以上の論争は、不要であると思う。

邪馬台国の所在地は近畿の大和国の纏向遺跡で良いと思う

ここでは、九州説の方々が、邪馬台国の所在地は近畿の大和国でない、という、その箇所の解釈方法を見てみたい。

(1) 銅・鉄器類（矢じり・カンナなど）勾玉類などの出土数が圧倒的に、北部九州に比較すると大和地方には、ほとんど出土していない。

(ア) この銅・鉄器類の出土数だが、本当に邪馬台国の時代を反映しているのだろうか？まだ邪馬台国が存在していない、さらに古い時代の威信物も含まれているようである（甕棺墓からの出土数は削除すべきか）。さらに、その数値のデータは 30 ～ 40 年前の数値であり、最近の発見の数値は反映されていないようである。北部九州は、元々、中国大陸や朝鮮半島に近く、邪馬台国の時代より、古くから、その遺物を多く伝わっているだろうし、例えば、志賀の島で発見された漢の倭の奴国の王の金印の時代には、確かに纏向遺跡などはまったく存在しなかったはずであり、サンプリングする時代を邪馬台国の時代に合わせて、比較すべきである。

(イ) 大陸に近い北部九州の王族（天孫族）たちは、より古い時代（百余国に分かれた頃）の王墓（数が多い）から発掘されて王墓から出土しているのである。当然、近畿より、実用的な銅・鉄器類などは、遠く離れた近畿地方の大和に比べると、その在庫は、多くあるのは自然であり、各々の王墓（数が多い）に威信財として、その多くを埋葬できるだろう。一方、纏向遺跡では王墓と言われる纏向型前方後円墳（大きさが 100 m 前後）の数は 5 ～ 6 基と少なく、考古学的に発掘された纏向型前方後円墳は少ないのである。これらの中に、特にホノケ山古墳では 1 ケ所で 180 個の銅・鉄鏃や画文帯神獣鏡が発掘されており、わが国には 今までに類例のない石囲木槨が発掘されている。また、再生利用の可能な銅・鉄器類は大和では非常に貴重品なもので北部九州でも、同じだが王墓以外の墓に埋葬するという習慣はなかったのであろう。

(2) 方向が南水行を東に間違えることなど有りえない。

九州説を唱える方々は南水行を東水行に修正することを、絶対に許さない。しかし、南水行 20 日や 10 日や一か月は何かの間違えか？または魏志倭人伝に倭国への行程で、その起点である出発地を大陸や朝鮮半島になるということは許されるようだ。同時に三か所の数値を転記ミス？などとは有りえないと思う。また、瀬戸内海の内海を抜けて、東に船で水行すると無数を島々に、その視野

を遮られ、さらに、海上の上からでもあり、太陽が必ずしも東から昇るのではなく、それぞれ、視界が遮られた島々の端々から昇るのであり、方向感覚が間違っているのは、無理のない話である。また、7世紀前半の撰述された中国の知識人による（隋）書、倭国伝、南を東であると修正記述されているのである。

- (3) 邪馬台国に敵対している狗奴国は女王国の南あり、その所在地は九州島の南（熊本県辺り？）説が有力であり、邪馬台国が近畿大和にあるというのは有りえない。

この狗奴国の所在地が邪馬台国の所在地に決め手になるという方々がいるが、本当にそうだろうか？前述したが、当時絶対に無かったメルカトル図の日本列島を姿・形を頭に思い浮かべるのは、やめるべきである。狗奴国の所在地については、この国の国王や官職名、などから推察すると奴国に類似しており、おそらく、奴国の宗家（天孫族）の分家であろう。「記・紀」に語られる熊襲か？ここで大和説を唱える方々に、近畿大和の東である東海地方であるという説があるが、邪馬台国より、さらに遠方にある、狗奴国の国王名や官名は記すことは難しいし、魏志倭人伝に、**素より和せず**、と記載されている。東海地方は邪馬台国の時代より、古い時代から、近畿大和地方（纏向遺跡含めて）密接な関係があるようで、東海地方（愛知県など）様式の土器や矢じり等が多く出土しており、**素より和せず**、には当たらない。やはり、この説もメルカトル図に束縛されて南を東に読み替えているのか？そんな必要はないのである。

- (4) 女王国に東、海を渡ること千余里にして、複、国あり、皆倭種なり、と魏志倭人伝に記載されており、このことは、四国島のことであり邪馬台国の九州説の決め手である。という人もいる。

本当に、四国地方のことであろうか？後世の行基の日本地図にも記されていない四国島が記されているならば、九州島と約600mしか、離れていない、人口も多く発展していた、と思われる本州（山口県など、防州地方）がまったく無視されていることになる。文面から推察するに、おそらく倭人から聞いたと思われるが、本州（山口県、島根県など、防州地方）には、すでに邪馬台国の時代より、古く発展した、出雲地方の大型古墳である四隅突出型古墳や楯築遺跡（古墳）を構築した古代倭人がいたことが、まったく無視されていることになり、不自然であり、魏志倭人伝の女王国に東、海を渡ること千余里にして、複、国あり、皆倭種なり、という記載が即、四国地方のこととは言えない。

- (5) 纏向遺跡の箸墓古墳周辺で発掘された乗馬の馬具である木製の鐙が発掘された。倭国では乗馬が始まるのは、邪馬台国の時代より、後世になるのだから箸墓古墳は邪馬台国の時代で無い。

この木製の鐙が発掘された箇所は箸墓古墳が構築された時期（下層）とは言えず、墓の本体ではなく、周辺の溝であり、後世に廃棄された？ゴミ、という考古学者もいる。纏向遺跡の特徴としては、他の弥生時代後期の村々に見られるような竪穴式の住居跡や水田などはなく、近年、次々と発掘されている竪穴式ではない掘立柱の大型の高床式の建物群、農具などよりは建築・土木用具などが発掘されており、倭国には史上初めて、出現した政治（宗教）都市？として、水田耕作や農耕に携わらないような人々の存在を思わせるような、従来の弥生時代の村々と違い、計画的に、直線で企画された建物群や囲いなど、さらに周辺の交通網も板塀などで泥止めした大きな運河もあり、この政治（宗教）都市？で生活した農耕に携わらない人々の食糧や生活用品などの輸送に利用され、また当時の構築物の農耕に用いる用具でないような木製の建築・土木用具が出土しており、最近では、大量の桃の種（桃は神聖な食べ物として扱われ、神事？利用されたものか？）の放射性炭素測定が測定され、西暦 135～230 年前後に集中しているようである。

ちなみに、放射性炭素による、測定数値の幅は確率であって、その幅の平均値をみると約 50～100 年ずれているのでは、という人もいるようだが、確立と平均値では、似て非なるもので、放射性炭素による確率では、その幅に入れば、良いのであり、その平均値と比較しても、意味がないのである。

ここでは、九州説の方々が、邪馬台国の所在地は九州島（特に北部地域）である、という、その箇所解釈方法を見てみたい。

- (1) 福岡県の筑後川下流地域という説がある。南水行 10 日（伊都国からの放射式によると）で到着するというが、どのような船を想定しているのだろうか？当時の土器や古墳などに描かれている船をみると、数人の漕ぎ手が櫂のようなもので、漕いでいるようで、大きな帆のような無いようである。つまり、小さな帆？のようなものを利用して、水行したかもしれないが、要するに、手漕ぎの船で伊都国から西へ向かい玄界灘から外海の黄海に出て、複雑なりアス海岸などの岸に沿って南下してするので遠回りになり、沖に出ると季節風や黒潮など、大変危険であり、季節によっては、全く不可能である。その後、有明海を北へ北上？（南水行から真逆）するというのである。また、伊都国から陸行では 4～5 日でも到着できる距離であるのに、わざわざ危険な海から水行することは考えられない。そもそも、手漕ぎの船で外海に出るということは無謀で不可能である。この地域は魏志倭人伝の邪馬台国への行程されている記載から、かけ離れているのである。

この地域の説を唱えている人の中には奴国から、那珂川を南下し、一旦、陸行し、筑後川に出て水行するのだという。または、途中で、当時は両河川をつなぐ運河があったのでは？とその運河を探している人もいるようである。

- (2) 奴国の隣・近い周辺？または福岡県全体？に邪馬台国があったという説がある。南水行 20 日南水行 10 日、陸行 1 ヶ月は、何かの間違え？または、その日数に合わせて出発する起点を朝鮮半島や大陸の洛陽まで戻すようだが、この出発する起点を自説に沿って合わせると、すなわち九州島全体へどこでも自由に設定できうるのである。これが倭国に一か所にしか、無いはずの邪馬台国が九州のあちらこちらに乱立する理由である。魏志倭人伝には朝鮮半島南端から北部九州まで詳しく、邪馬台国への道のりが記載されている途中で、すでに邪馬台国へ到着している？という解釈であり、文面全体から読んでも、そのようには読み取れないし、2 万戸人口を有する奴国のそばに、7 万戸の人口を有する邪馬台国がある？のだろうか。このようなことから明らかに邪馬台国や投馬国は離れているようであり、また近ければ、伊都国や奴国に外交官や代官を派遣する必要は無いのである。

邪馬台国の所在地も乱立しているのだが、投馬国の所在地は、さらに、あちらこちらに、乱立している。九州説の方々には、倭国で第二の戸数があ

る投馬国の記載は不要であり、邪馬台国の倍の距離？らしい。ということでも、適当にあてがって、その説明も少ないようである。倭国で第二の戸数があるという投馬国には、古代人が住んだ痕跡が、数多く残っているはずある。投馬国は九州島より陸続きではなく船で行くしかない、どこかの島ではないか？との説もあるが、当時、人口5万人を要する陸続きでない島がどこにあるだろうか。

また陸行1ヶ月は(約600km) = 水行10日と同じ距離(約600km)となり、当時の航海技術では風向きが毎日追い風で良ければ可能だが、それ以外の風では不可能であろう。

南水行20日、南水行10日、陸行1ヶ月との記載の数値が間違えではないとすると水行1日・陸行1日では、どの程度、進むことができるのだろうか水行20日、水行10日というのは、**どれくらいの距離(km)なのか？**

やはり、平安期の土佐日記によると、西暦934年12月30日に土佐(高知市)を出航して室戸岬～阿波の鳴門～紀伊水道～翌年2月27日に淀川河口に着いておりその間、海賊におののき、土佐からの所要日数は56日で室戸岬での悪天候などで、船止めされた37日間を除くと19日の海路であったとのこと。およそ、その距離は480km。

また菅原道真は平安京(京都)～大宰府(福岡県)まで**34日**で赴任している。陸行か船旅かは不明であるが、身分が高い人なのでおそらく、船旅だったのであろう。

さらに万葉集の中でも、難波と大宰府の往還する官吏、遣唐使、防人などの人々も瀬戸内の山陽沿岸の船旅は、**ひと月に及んだ**とし、船底の浅い木船に身をゆだねて、人力で潮流の変化に抗して苦勞し、進んだと記されている。

難波と大宰府の距離は約660kmであり、この魏志倭人伝に記されている(水行20日+水行10日=水行30日の距離)はおよそ当時の船旅の日程と一致しているといえる。

ここで陸行1ヶ月はどれくらいの距離(km)なのか？

通常の人が歩く速度は、3～4 km/hとされているので、下記の通りとなる。

25日(悪天候や休憩日を除く) × 3 km/h(時速) × 8h(一日の歩く時間として) = 600 km(陸行1ヶ月)

ここに、鎌倉時代に十六夜日記に記されているものを、参考に見てみると、女性が京都～鎌倉まで約450 kmを13日で踏破している。当時の街道はそれほど、整備されていないと思われるが、昔の人は、現代人に比較すると足は達者であったようである。

魏志倭人伝の記載されている、水行10日、陸行1ヶ月とのことは水行して、さらに、①陸行するのか、または、水行すると10日で、②水行せずに、陸行で行くと1ヶ月なのかは、その解釈は分かれるところであるが、②であるとすると、南水行10日と陸行とは、同一の距離となり、当時の風まかせで、手こぎの船では、陸行1ヶ月の距離(600 km)を進むのは、通常は無理であろう。また、上記の平安期の類例から見ても、困難である。水行(20+10)日と陸行1ヶ月は同一の距離となり、上記の平安期の類例から見ると自然である。又、近世に至るまで、この西海道(北部九州と大阪)は徒歩より、海運が主流である。

- (3) 南部九州には奴国より三倍の人口の多い国というのは、ありそうもないし、さらに南には狗奴国があるので、あまり南部九州には近づけない。筑紫平野を邪馬台国とすると、それでもまだ、距離があるので、1ヶ月を一日の誤りとする解釈が、考え出されたものと思われる。放射上の読み付け加えて、さらに、その日程さえも北部九州に、その所在地を納めるために恣意的に間違えとして、解釈されたものだろうか。

また、邪馬台国へ南水行、陸行の到着するための行程で、短里説？縛られて、その出発地点を朝鮮半島や大陸の、どこかの、適当な地域にあてて、その上記の日数に合わせて？いる説も、九州説を唱えている方々のでは多く語られている。これは、たとえばの、話であるが、バケツ(深さが30 cm=短里説？)中に、棒(長さが60 cm=南水行20日・10日)を、その中に納めなければならない。という話になる。この出発地点を大陸や朝鮮半島にするという説を力説する方々がいるようだが、仮に、出発地点を

自由にあてれば、邪馬台国の所在地は、合理的に、北部九州地域は、もちろん、九州島全土に広がり、すべてがフリーとなることになる。これでは九州説の方々が一致しないはずである。

(4) 筑後川流域

伊都国を基点として放射上に各国を見る説がある。何で伊都国が基点なのか？魏の役人が、この国に滞在したところだから？ということらしいが、その文面からは全く読み取れない。方向と里程の記載されている順番が違っている？又、「至」と「到」の差についているから、伊都国がその前まで連続して繋がって読まれていたのが、急に此处から放射上に読まれることに変わるという？ことらしいが、何故？これも文面上からは読み取れない。また伊都国以外の奴国、末盧国、不弥国でも、その基点として読む説もあり、北部九州の海岸沿いが東西に広がり、基点がどこでも有効？ということになり、その基点から放射上に読む方法である。それでいくと邪馬台国は九州全土どこでも降り注ぐことになり、後は距離だけである。これでは絞り込めないのは当然だろう。

(5) 南水行20日で投馬国、南水行10日、陸行1ヶ月で女王国

この文言は解釈がきわめて重要で、要となる箇所である。3ヶ所の数字が同時に間違えているということが起こりうるだろうか？ここで、九州説の方々は難問の壁に当たるようなもので、この文言通りだと、その邪馬台国の所在地はメルカトル図に縛られて鹿児島県の南端もしくは、海に没してしまうので、ゆえに放射上に、その行程を分け、さらに日数を変えてしまう（間違えとして？）のであり、仮に九州島がもっと南に長く（会稽の東というように）その先に奴国より、大きな都市が2ヶ所適当なところがあれば（魏志倭人伝の著者である陳寿は倭国とは、そのようにイメージしていたようだが）、放射上に読む説は出なかったのでは、つまり北部九州に邪馬台国を納めるために、相当無理をして、便利？な論理（アイデア）として、連続して来た行程を、ここで、急に放射上に読んでいるようである。現今の日本の権威ある偉い学者が提起した説であるが不弥国から、里程を数値で記載されていないのは、船旅では、初めて行く邪馬台国までの、その里程を計るのは困難であるからだろう。

(6) 南水行20日で投馬国、南水行10日、陸行1ヶ月で女王国・・・の基点を帯方郡からとする説もある。

これは朝鮮半島の帯方郡から出発して朝鮮半島の陸行と倭国内での陸行1ヶ

月と水行 10 日を合わせて女王国へ着くという。これも、文面の流れから、全く読み取れないが、ここで急に帯方郡を基点？というのもおかしい。朝鮮半島は海岸沿いに水行していると記載されており、朝鮮半島の陸行？を何故、また記載しなければならないのか？水行は朝鮮半島南端から北部九州までの日程なのか、また、投馬国は、まったく女王国とは別で、同様に帯方郡から投馬国まで、すべて水行 20 日なのか、急に陸行は無くなるのか、陸行ではいけない島国なのか？倭国第二位の戸数を有する重要な？投馬国を邪馬台国の経路案内の途中に、記述する必要はあるのか。投馬国の所在地についてはやはり九州全土に比定されている。いずれにしても、この説では北部九州？のどこへでも、邪馬台国の比定地はどこへでも合理的？に持っていけるといふ便利？な論理（アイデア）である。

何処へでも持っていけるといふ説では、その行程はまったく意味をなさない。

結 論

不弥国～邪馬台国まで船旅で行くと南水行（20+10）日、あるいは徒歩で行くと、不弥国～邪馬台国まで陸行 1 ヶ月と読む解釈が適切と思われる。

女王国までの一万二千里（一里が約 70～80m？ぐらいの短里説？）が正しいとすると。

仮に水行 20 日、水行 10 日、陸行 1 ヶ月の三か所の数値が間違えとして、伊都国～邪馬台国までが 1, 500 里が正しいとし、さらに伊都国を中心に放射上にて読むと仮定してみる。

伊都国を中心にコンパスで邪馬台国が所在するという地名をなぞらえると、おおよそ、九州島の北三分の一が含まれ、地名で言うと西から島原半島の先端～玉名市～筑後川エリ（邪馬台国があったと比定する人が多い地区）～阿蘇～大分市～宇佐市などが出てきます。

そこで伊都国からの日数の数値が間違えとすると、上記の地区の内 1, 500 里（80～100 km）で到着する日数は陸行で、ゆっくり行っても、約 6～8 日間でしょうか。

その経路行程は南で、その行程日数は何日でも良い（フリー）のだから、北部九州のどこでも邪馬台国の所在地としての整合性が取れることになりなす。

南水行で、行くとなると、上記の地名の内陸の筑後川エリアには、外海を船で行く？必要がまったく無く、まして、当時の動力の無い、小さい船舶で危険な外海、黒潮や季節風に逆行して、陸に沿って航海しても、季節によっては、困難又は不可能であったと思われる。

島原半島の先端と筑紫平野の水行（船旅）は大きく南～北（ここも魏志倭人伝の記述と

違う)へ迂回し、有明海と川筋はともかく、外海にも出ますので、南水行10日では不可能とも思われる。

行程日数は間違えなので、何日でも良い(フリー)になる。

末盧国	伊都国	奴国	不弥国	
-----	-----	----	-----	--

放射上に読むことで上記のすべてが基点となりうる。南はそのまま。

島原半島	山門郡	甘木市	大分市	宇佐市	遠賀川流域
------	-----	-----	-----	-----	-------

魏志倭人伝の日数は間違えなので、各自の場所にフリーで数値を設定できることになる。水行についても日数は間違えなので、陸行と同様にしの日数はフリーとなる。

ここで九州説の方々の多くが、筑紫平野に、その邪馬台国の所在地があったとされているが魏志倭人伝に記載されている水行(船旅)を、陸で行くほうが近いし、当時の航海技術でわざわざ危険な外海に出て、大回りして行くことはまったく不自然である。

また、九州説の方々の投馬国の所在地についても、同様に邪馬台国の所在地も約二倍の距離の位置に適当に選定できる。しかし、九州説の方々は、この投馬国の所在地についてもやはり、あちらこちらと絞り込めないようだ。その行程がフリーであり、さらに、その方角さえフリーとなってしまう。九州説では投馬国はまったく不要であり、その存在地にも理由や意味がないようだ。

北部九州の豊富な遺跡郡について

北部九州のある地域に、邪馬台国の所在地を決める、優劣を距離、方向、日程以外に判別するとしたら、人口の多くを養える稲作に適した沖積平野の有無でしょうか？

⇒北部九州には平野の大小はあるけれど沖積平野はどこにでもある。

邪馬台国が存在したという遺跡でしょうか？

⇒もともと北部九州は弥生時代前期より日本列島の中でも先進的なエリアであり、どこを掘ってもとは言い過ぎでしょうが、その遺跡や墳墓、土器、青銅器など規模の差と時代差はあるけれども、どちらにも豊富にあります。しかし、それらの遺跡群は、そのほとんどが、邪馬台国の時代以前のもと思われる、西暦200～260年頃のものに絞り込むと(できないかも?) いかがなものだろう。

こうして、一カ所にしかない邪馬台国が合理的に？乱立してしまう結果となります。また、投馬国も同様に乱立してしまっている。

これが九州説の邪馬台国の所在地論争の現状でしょう。おそらくは余程の遺物が発掘されないと（一つ二つでは移動説が出るので）、今後、100年経っても、この論争は尽きないでしょう。

また九州説に有利とされている女王国に東、海を渡ること千余里にして、複、国あり、皆倭種なり、・・・とあるが四国？のことだろうとされている。ならば北九州のすぐ東にある本州は？さらにその後続く侏儒の国は女王国を去ること四千里、裸国、黒齒国？・・・周旋五千余里なりという。また会稽の東ともいう。これは現代の日本列島と大きくかけ離れていることが分かる。

つまり魏志倭人伝の著者である陳寿のイメージと実際は大きくかけ離れているようである。当時、中国ではもちろん倭国内でも正確な日本列島をイメージしている人はいなかったはずである。

なぜ、このように邪馬台国の所在地が乱立してしまうのだろうか？そもそも文言の行程日数をフリーとし、紀行文の最も重要な行程である日数を三点とも間違えであるとして、結果的に全く無視するというのは、はなはだ乱暴と言えるのではないのでしょうか。

結論

ゆえに帯方郡より九州の北、三分の一に邪馬台国があるといい、また会稽の東とも一致しない、邪馬台国まで一万二千里を短里説？での扱いが間違えであるとして、魏国で使用されている通常の一里（430mぐらい）であり、南水行20日、10日、陸行1ヶ月をそのまま、きちんと押さえて修正は最小限にして、素直に解釈していくべきではないでしょうか。

ここで、その不明瞭であいまいな邪馬台国の所在地に関する文言と、さらに考古学的遺跡などを見て、九州説と畿内説とをまとめて比較してみる。これも諸説あるようだが概ね下記の表のごとくまとめられる。

南水行 20 日、投馬国に至る。南水行 10 日陸行 1 ヶ月で邪馬台国に至る。を基本として
○は概ね一致、△は少々違うが合理的な説明があれば良い、×は一致しない。

方向と距離	九州説 日数は間違え	畿内説 南は東の間違え
① 女王の境界が尽きるところにその南に狗奴国あり	○熊襲	△熊襲、又は東海、毛野倭国内の使訳が通じるところの南という意味にも取れる
② 郡より女王国まで一万二千里	△(短里説?)九州島の北1/3となり残りが狗奴国、他は不明?島々?	○(通常の里)行程日数と一致する
③ その道里計るに当に会稽・東冶の東	×一万二千里と矛盾している	○文言が南とあるので(本当は東の訂正あり)
④ 女王国東渡海千余里	△本州が無視されている東南四千里で皆倭種⇒四国?朱儒国は?	△伊勢湾が東? 皆倭種は尾張? 日本列島の姿とかけ離れている
⑤ 女王国より以北・中略・その余の国々遠絶で記述することができない	△不弥国より千三百里で遠絶とは言えない	○不弥国よりは遠方にある
⑥ 女王国より以北は特に一大率を置き諸国を檢察せしむ	△上と同じで遠くないので不要	○遠方にある
⑦ 郡の倭国への使者の搜索、文書の検分	△上と同じ	○上と同じ

⑧ 船で水行 延喜式によると筑後や肥後から大宰府までは陸行で1日であったという。	△内陸であれば船は不要、河川であれば要 筑後川流域であれば陸行が普通で日数が余計にかかり、わざわざ遠回りをして、危険の多い外海に出る航海はしないだろう。	○船が主流
⑨ 銅鏡百枚	△百枚の鏡は全部、後漢鏡	△三角縁神獸鏡、不足分は国内でコピー ○画帯紋神獸鏡
⑩ 宮室、楼閣	×今のところ発見されず	△巻向遺跡
⑪ 大きい塚を作る、径百余歩	×今のところ発見されず	○箸墓古墳

上記の表をみると、邪馬台国の所在地は、畿内の纏向遺跡であろうと思われる。それにしても魏志倭人伝によると、実際の日本列島の地理と大きく、かけ離れていることが分かる。歴史的に第一級の資料には違いないが、日本列島の地理に関して正確とは言えず、方向、行程、日数などは矛盾もあり、あまり当てにならない。まして九州説は最も重要である所定日数を間違えであるとして、すべてフリーとし、その読み方も放射上にし、その基点さえも人によって、違うことも加えて混乱し、九州島全土にその所在地を持っていく？という妙なことになっている。九州説の方々は九州のある所に統一することさえ出来ずにいる。

しかし、纏向遺跡と箸墓古墳については西暦300～350年頃ではという説もある。これは歴博で発表した放射性炭素C14測定方法はその年代の幅が大きいことや、年輪年代法は、実際に伐採した年代であり、大木などは再利用した場合はずれることになる、更に、今般は、誤差の出やすい小枝を使用しているということもあるが、その他、多くの（例えば運河に使われた土砂止めの板材など）出土した建築用具類は放射性炭素C14測定による数値と年輪年代法による測定地は概ね、西暦200年前後で一致している。

三角縁神獸鏡も**すべて**、国産のもので、卑弥呼のものとは無関係であるという説もある。ならば何故、その無関係の畿内の別な勢力が、景初三年等の編年にわざわざ鑄造したのか？その勢力が、何故、三角縁神獸鏡を大量に鑄造したのか？畿内の強大な勢力を有する集団（国）そんなことをする必要はあえて、ないのでは？

上記の 放射上の読む、 日数の間違い、 基点を帯方郡から、の内、一つでも正しい解釈とすると。

これこそ百花繚乱の元である。邪馬台国の所在地を絞り込めるはずは無い。上記の説に沿えば、これから 100 年後、その議論は絞り込めないだろう。

つまり、逆にいえば、上記の三点の説は誤りであろう。